

# 不変性原理から観た短編小説のひねり

— O・ヘンリーを中心に —

橘 高 眞 一 郎

## 1. はじめに

今から30年以上前に Lakoff and Johnson (1980) が、人間の概念を構築しているものはメタファーであると主張して以来、メタファーを分析することによって人間の思考の本質に迫ろうとする数々の試みがなされて来た。

We have found, [...], that metaphor is pervasive in everyday life, not just in language but in thought and action. Our ordinary conceptual system, in terms of which we both think and act, is fundamentally metaphorical in nature. (Lakoff and Johnson 1980 : 3)

言うまでもなく、文学作品は人間の思考の産物である。従って、それらが如何なる思考プロセスによって成立しているのかを、メタファー分析によって探ろうとする試みがなされるのは当然のことで、事実、多くの研究者が文学作品をメタファーの観点から分析して来た (cf. Lakoff and Turner 1989, Freeman 1995, Turner 1996)。本稿もそうした試みの一つにすぎないが、O・ヘンリーの代表的短編の中から二編 (「最後の一片」、「賢者の贈り物」) を取り上げ、Lakoff (1993 : 215) が提唱した不変性原理 (the Invariance Principle) が短編小説のひねり (twist) においても保持されていることを論じる。

## 2. 概念メタファー

ある語が、本来の領域とは異なった領域に用いられる時、それは決して恣意的に用いられるのではなく、異なった概念間に成立するメタファー（概念メタファー）によって体系的に用いられている。

例えば “She got a really high mark in the test.” という文の high という語は、本来の「物理的な高さ」ではなく「量の多さ（得点の多さ）」を意味しているが、それを可能にしているのは MORE IS UP（あるいは QUANTITY IS VERTICAL ELEVATION）という概念メタファーである（cf. Evans 2007 : 35）。また “His criticisms were right on target.” という文における right on target という語句は、本来は「命中して（的を射て）」という戦争に関わる用語だが、ここでは議論に関して用いられている（cf. Lakoff and Johnson 1980 : 4）。それが可能なのは ARGUMENT IS WAR という概念メタファーが我々の思考の中に存在しているからである。

概念メタファーは、ある概念領域を別の概念領域によって理解する思考プロセスであるから、異領域の概念同士を推論によって対応させる写像（mappings）は、概念メタファーの根幹をなしている。

They [i. e. metaphors] are anything but that [i. e. propositions]: metaphors are mappings, that is, sets of conceptual correspondences.  
(Lakoff 1993 : 207)

The metaphor is not just a matter of language, but thought and reason. The language is secondary. The mapping is primary, in that it sanctions the use of source domain language and inference patterns for target domain concepts.  
(Lakoff 1993 : 208)

例えば LOVE IS A JOURNEY という概念メタファーでは、具体的な

JOURNEY という概念領域（起点領域）と抽象的な LOVE という概念領域（目標領域）が対応され、起点領域の「旅人たち」は目標領域の「恋人たち」に、「進んだ距離」は「恋愛関係の進展」に、「道の選択」は「恋愛関係の決定」に、「障害物」は「困難」に、「目的地」は「恋愛関係の結末」に写像され、それぞれ “Look how far we’ve come.”、“Our relationship is at a crossroads.”、“The marriage has been a long, bumpy road.”のような表現が生じる（cf. Evans 2007 : 137）。それが可能なのは JOURNEY（START—PATH—GOAL）と LOVE（START—PROCESS—GOAL）の各概念構造が類似しているからである。

概念メタファーは概念上の対応関係であるから、概念上の対応関係が理解される範囲内であれば、語彙項目の選択はかなり自由である。そのため、通常あまり用いられない語彙項目による奇抜なメタファー（novel metaphor）も可能になる。

例えば、LOVE IS A JOURNEY という概念メタファーから生じた “We’re driving in the fast lane on the freeway of love.” では、高速道路の追い越し車線を疾走する車についての誰でも持っている既存の知識が恋愛関係に写像され、短時間に急速に進展する、だがしかし、危険で破滅するかもしれない恋愛関係という推論が可能になる。（cf. Lakoff 1993 : 210-211）。

概念メタファーは言語ではなく写像に依存しているので、概念構成要素間の対応関係を認識させることが出来さえすれば成立する。そのため文学作品には多様な概念メタファーを見出すことが出来る。

例えば Lakoff and Turner (1989) は DEATH IS DEPARTURE という概念メタファーを取り上げて、様々な文学作品の中でそれがどのように表現され得るのかを示している。例えば “And I have seen the eternal footman hold my coat,” (T. S. Eliot) では「馬丁」が、“Death hath a thousand doors to let out life.” (Philip Massinger) では「ドア」が、“Swift has sailed into his rest” (W. B. Yeats) では「漕ぎ入る」が、「出発」を暗示している（cf. Lakoff and Turner 1989 : 10-11）。これらの例で「出発」という概念が「死」という概念に写像可能なのは、両者が「今居る場所から居なくなる（去る）」

という点で対応しているからであり、この概念メタファーの中で用いられている語彙項目は、全て「出発」という概念の下に一括される。そうした対応関係の発見に読者を導くような工夫を凝らしているのが文学的表現の特徴の一つであろう。

### 3. 不変性原理

概念メタファーにおいて、起点領域の全ての要素がそのまま目標領域に写像されるわけではない。Lakoff and Johnson (1980)は、概念メタファーにおける、所謂「写像の欠け (写像されない語彙項目の存在)」について “[...] the metaphor THEORIES ARE BUILDINGS has a “used” part (foundation and outer shell) and an “unused” part (rooms, staircase, etc.).” (52) と述べ、“unused” な部分は“imaginative expressions”として用いられるとしているとして (cf. Lakoff and Johnson 1980 : 53)、次のような例を示している。

His theory has thousands of little rooms and long, winding corridors.  
His theories are Bauhaus in their pseudofunctional simplicity.  
He prefers massive Gothic theories covered with gargoyles.  
Complex theories usually have problems with the plumbing.

(Lakoff and Johnson 1980 : 53)

しかし「写像の欠け」の問題は、単なる「使用する/使用しない」の問題ではないことは、Grady *et al.*(1996) が示した例によっても明らかである。

[...] there are crucial experiential elements of buildings which are not conventionally mapped onto theories. Consider the following sentences, which are less than felicitous (at least in the absence of context):

d. ?The theory has no windows.

e. ?The tenants of her theory are behind in their rent.

(Grady *et al.* 1996 : 178)

確かに「窓」は建物という概念の下にあるが、その採光、換気や外を見ろという機能は、理論の持つ機能と全く合致しないし、「店子」や「家賃」も建物という概念の下にはあるが、それらが一体理論の何に対応するのか想像すらつかない。つまり「新しい側面での類似性は、その経験に対する私たちの認識・概念に矛盾してまでは、創造されない」(谷口 2003 : 41) ののである。

この「写像の欠け」という現象の説明として提唱されたのが、Lakoff (1993) の不変性原理 (the Invariance Principle) である。

Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with the inherent structure of the target domain.

(Lakoff 1993 : 215)

そして「写像の欠け」を目標領域制約 (target domain overrides) によって、より詳しく説明している。

A corollary of the Invariance Principle is that image-schema structure inherent in the target domain cannot be violated, and that inherent target domain structure limits the possibilities for mappings automatically.

(Lakoff 1993 : 216)

従って概念メタファーでは、目標領域制約により目標領域の概念構造に対応しない起点領域の部分は写像されず、結果として「写像の欠け」が生じることになる。

概念メタファー THEORIES ARE BUILDINGS において “?His theory

has no windows.” という表現は、普通、成り立たないが、もし作家が「理論」というものはネット上にアップされ不特定多数の人がそれに手を加えて完成されたものでなければ公認されないのが普通である」という状況を設定したとすれば、「理論」は外に開かれた「窓」を持つことが可能になり、「建物」の概念構造にある「窓」と対応させることが出来るようになり、「彼の理論は独善的だ」という意味でその表現を使うことが可能になるかもしれない。Grady *et al.* (1996) も前掲の2つの例文 (d, e) に関して “These and other such expressions can, of course, be produced and understood, given the proper context.” (178) と述べ、文脈によって「写像の欠け」が解消される可能性を示唆している。

#### 4. 作品分析

創造的思考の産物である文学作品で、創造的文脈による意外な展開（ひねり）が行われても、常識に全く適合しない荒唐無稽な文脈でない限り、概念メタファーの不変性原理（目標領域制約）は保持されていると考えられる。

ここでは、O・ヘンリーの代表的短編二編—「最後の一葉」（“The Last Leaf”）、「賢者の贈り物」（“The Gift of the Magi”）—を取り上げて、「不変性原理」がひねりにおいても保持されていることを検証する。

##### 4.1 「最後の一葉」—なぜ彼女は死ななかったのか？

この作品で用いられている概念メタファーは PEOPLE ARE PLANTS である。人間の生長サイクルを植物のそれに対応させているこの概念メタファーは、文学作品では典型的なものである。

A standard way of understanding and talking about the life cycle is in terms of a metaphor according to which people are plants or parts of plants and a human life corresponds to a plant's life cycle.

(Lakoff and Turner 1989 : 12)

植物の生長サイクルは大体次のように考えられる。(1)種 (2)発芽 (3)苗 (4)開花 (5)結実 (6)枯死 である。これを人間の活動サイクルに対応させると (1) 活動の開始 (2) 達成・成果の兆し (3) 活動の継続 (4)と(5) 達成・成果 (6)達成・成果の維持困難 ということになる (cf. 靱山 2006: 14-16)。

Shakespeare の四大悲劇の一つ『マクベス』(*The Tragedy of Macbeth*) にも、PEOPLE ARE PLANTS が、興味深いことには、上記の順番で用いられている。以下の引用文の下線 (筆者) は、植物 (起点領域) の生長サイクルを人間の活動サイクル (目標領域) に写像することによって理解が可能になる。

(1)種 (→活動開始)

If you can look into the seeds of time  
And say which grain will grow and which will not,  
Speak then to me, who neither beg nor fear  
Your favours nor your hate. (1.3.61-64)

(3)苗 (→活動継続)

I have begun to plant thee, and will labour  
To make thee full of growing. (1.4.32-33)

(4)開花 (→達成・成果)

It is myself I mean; in whom I know  
All the particulars of vice so grafted  
That, when they shall be open'd, black Macbeth  
Will seem as pure as snow, [...] (4.3.61-64)

(5)結実 (→達成・成果)

Come go we to King. Our power is ready;  
Our lack is nothing but our leave. Macbeth

Is ripe for shaking, and the pow'rs above  
Put on their instruments. (4.3.276-280)

(6) 枯死 (→維持困難)

I have lived long enough. My way of life  
Is fall'n into the sear, the yellow leaf; (5.3.26-27)

さて「最後の一葉」では、まず起点領域である「植物」の葉の生長サイクル(1.葉芽が出て 2.葉が繁り 3.葉が萎れ 4.葉が落ちる)の中の「3.葉が萎れ 4.葉が落ちる」が、目標領域である「人間」の生長サイクル(1.生まれ 2.育ち 3.病み/老い 4.死ぬ)の「3.病み 4.死ぬ」に対応している。物語の展開は次の通りである。

画家志望の貧しい Johnsy が病気になる、日に日に生きる気力を失くしていく。ある日、Sue は Johnsy が何かを数えているのに気づき、一体、窓の外の何を数えているのかと尋ねる。

'Leaves. On the ivy vine. When the last one falls I must go too. I've known that for three days. Didn't the doctor tell you?' (180)

そして、窓の外のツタの葉が一枚だけになると、次のように呟く。

'It is the last one,' said Johnsy. 'I thought it would surely fall during the night. I heard the wind. It will fall to-day, and I shall die at the same time.' (182)

ところが、同じアパートに住んでいた Berhman 老人が、ツタの最後の一葉が落ちた夜に、こっそり、その背後の壁に本物そっくりの葉を描く。Johnsy はそれを本物と勘違いして、ツタの生命力に感動して、病気を直す気力を回復していく。



‘I’ve been a bad girl, Sudie,’ said Johnsy. ‘Something has made that that leaf stay there to show me how wicked I was. It is a sin to want to die, [...]’ (183)

このひねりの部分で、作者は落ちてしまったツタの最後の一葉を、Johnsyの気づかぬ内に Berhman 老人が壁に描いた本物そっくりの絵に置き換えることによって、葉の生長サイクルを「3. 葉が萎れる」からその一つ手前の「2. 葉が繁る」に逆転させている（こういう操作が文学作品の創造性を生み出す）。すると人間の生長サイクルもその操作に対応して逆転し、「3. 病み」、死にかけていた Johnsy が、その一つ手前の「2. 育って」いる時のような生命力を取り戻す。

葉の生長サイクルと人間の生長サイクルの対応関係から、落葉による Johnsy の死を予測していた読者は、意外な生長サイクルの逆転によってズレの感覚を味わうと同時に、この予想外の操作（ひねり）にもかかわらず、不変性原理が保持されていることを再確認して、その結末に納得する。（表1）。

(表1)

概念メタファー：PEOPLE ARE PLANTS		[記号]
葉の生長サイクル	→人間の生長サイクル	
1. (芽が出る)	→ 1. (生まれる)	→ 対応
↓	↓	↓ 自然な流れ
2. 葉が繁る	→ 2. 育つ	↑ 流れの逆転
↓↑	↓↑	( ) 未使用
3. 葉が萎れる	→ 3. 病む/老いる	
↓	↓	
4. 葉が落ちる	→ 4. 死ぬ	

PEOPLE ARE PLANTS による表現例

1. a scientist in the bud (竹林 2002)
2. Children thrive in this climate. (市川 1995)

### 3 & 4. I wither, I fall, like the autumn-kissed leaf

([www.poemhunter.com/best-poems/paul-laurence-dunbar/roses-5/](http://www.poemhunter.com/best-poems/paul-laurence-dunbar/roses-5/))

#### 4.2 「賢者の贈り物」—なぜ彼らの愛は失われなかったのか？

概念メタファーには1. 構造メタファー (structural metaphor)、2. 方向性メタファー (orientational metaphor)、3. 存在メタファー (ontological metaphor) という3つのカテゴリーがあり、相互に関係しあっている (cf. Lakoff and Johnson 1980 : 7-21)。例えば、「時間」に関する概念メタファーは次のように分類される。

##### 1. structural metaphor

TIME IS MONEY

You're wasting my time. (cf. Lakoff and Johnson 1980 : 7-9)

##### 2. orientational metaphor

THE FUTURE IS IN FRONT; THE PAST IS BEHIND

I can't face the future. (cf. *Ibid.* 43)

As we go through the years, ... (cf. *Ibid.* 43)

##### 3. ontological metaphor

TIME IS A MOVING OBJECT

I look forward to the arrival of Christmas. (cf. *Ibid.* 42)

この短編で用いられている概念メタファーは LOVE IS A GIFT であるが、存在メタファー (LOVE IS AN OBJECT) の観点からみれば、LOVEは「もの」として他に送ることが出来る(SENDER—OBJECT—RECIPIENT)。

[Give Love to Children Inc.] provides love, support & a voice to children who have experienced poverty, [...] or simply a life without

love. (www.facebook.com/givelovetochildren)

ネット検索をすると、この概念メタファーが「そのまま」の形で使われている例がいくらでも見つけられる。概念メタファーは言語表現の上位にある概念のため、「そのまま」の形で表面に現れることは余りない。それがたくさん見つかるのだから、この概念メタファーが如何に一般的なものであるかがわかる。

Love is always bestowed as a gift - freely, willingly and without expectation.

(www.brainyquote.com/quotes/quotes/l/leobuscag1142116.html)

True love is a gift. That's given away not just once but day by day.

(www.facebook.com/...Love-is-a-gift.../133779096667067)

You may be thinking how can love be a gift from God?

(www.heavenministries.com/Articles/love\_is\_a\_gift\_from\_god.htm)

Let's always remember that love is a gift.

(www.sing365.com/.../Love-Is-A-Gift.../B30C2D26B219F5E148256A39...)

概念メタファー LOVE IS A GIFT を構造メタファーの観点から見ると、GIFT と LOVE が極めて類似した概念構造を持っていることがわかる。両者とも、相手に対するプラスの感情（好意）と相手を欲ばせたいという願望（歓心）という類似した概念基盤の上に、1. 相手の利益を図り（負担/ 献身） 2. 相手の負担を求めない（無償）という概念構成要素を持つ。そこに起点領域 GIFT と目標領域 LOVE の対応関係（写像）が生じる。

この物語は、貧しい若夫婦 Jim と Della が、お互いに大切にしていたものを売却して、相手に贈り物をするが、お互いの目論見はすれ違いに終わるとい

う内容で、LOVE IS A GIFT の概念構成要素間にある「負担→献身」という対応関係（写像）を中心に展開する。これによって、作者は経済的負担の大きさが献身（愛）の大きさであるという点に読者の注意を向けさせる。以下は「負担の大きさ」と「献身の大きさ」に該当する箇所である（下線は筆者）。

a. (経済的) 負担の大きさ

・ Della の場合

Her Jim. Many a happy hour she had spent planning for something nice for him. Something fine and rare and sterling—something just a little bit near to being worthy of the honour of being owned by Jim. (2)

It [i.e. Jim's present] was a platinum fob chain simple and chaste in design, properly proclaiming its value by substance alone, and not by meretricious ornamentation—as all good things should do. It was even worthy of The Watch [i.e. Jim's watch]. As soon as she saw it she knew that it must be Jim's. It was like him. Quietness and *value*—the description applied to both. Twenty-one dollars they took form her for it, and she hurried home with the 87 cents. (3)

・ Jim の場合

For there lay The Combs—the set of combs, side and back, that Della had worshipped for long in a Broadway window. Beautiful combs, pure tortoiseshell, with jeweled rims—just the shade to wear in the beautiful vanished hair. They were expensive combs, she knew, and her heart had simply craved and yearned over them without the least hope of possession. And now there were hers, [...]. (5)

b. 献身（愛）の大きさ

・ Della の場合

‘Jim, darling,’ she cried, ‘don’t look at me that way. I had my hair cut off and sold it because I couldn’t have lived through Christmas without getting you a present. It’ll grow out again—you won’t mind, will you? I just had to do it. My hair grows awfully fast. Say “Merry Christmas!” Jim, and let’s be happy. You don’t know what a nice—what a beautiful, nice gift I’ve got for you.’ (4)

‘You needn’t look for it [i. e. Della’s hair],’ said Della. ‘It’s sold, I tell you—sold and gone, too. It’s Christmas Eve, boy. Be good to me, for it went for you. Maybe the hairs of my head were numbered,’ she went on with a sudden serious sweetness, ‘but nobody could never count my love for you. [...]’ (4)

・ Jim の場合

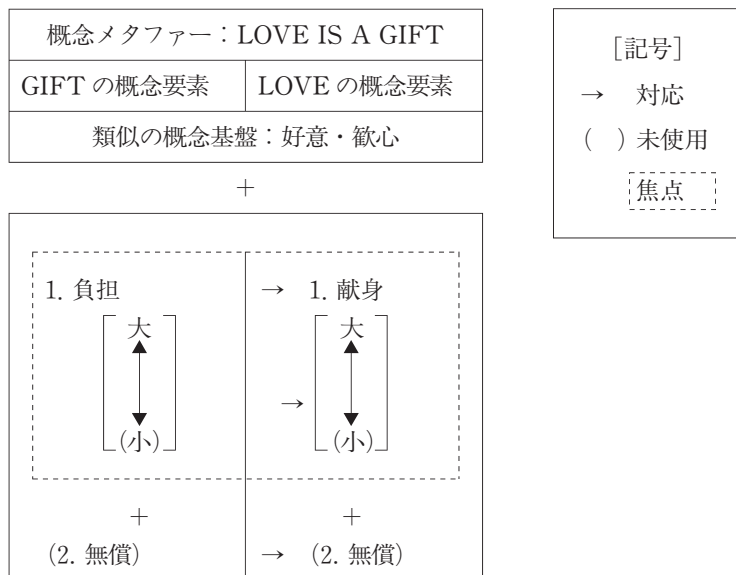
‘[...] I sold the watch to get the money to buy your combs. [...]’ (5)

作者は「大きな（経済的）負担＝大きな献身（愛）」という図式を読者に十分に認識させた上で、ひねりの部分で二人の贈り物を空振りに終わらせる（感激の場面を予測していた読者も、肩すかしを食って、ズレの感覚を味わう）。二人は暫し呆然とするわけだが、彼らの愛が失われることはなかった。それは、彼らが、結果はどうであれ、「大きな（経済的）負担＝大きな献身（愛）」という対応関係を再認識し保持できたからである。そのことは、相手が自分のために献身してくれたことを含意する Jim の次の言葉に読み取れる（下線は筆者）。

‘Dell,’ said he, ‘let’s put our Christmas presents away and keep ‘em awhile. They’re too nice to use just at present. [...]’ (5)

結局、この意外な展開（ひねり）においても、不変性原理が保持されていることを読者が再認識することで、この短編はハッピー・エンドに終わる（表2）。

（表2）



### LOVE IS A GIFT による表現例

1. This Valentine's Day, Express Your Invaluable Love for Under \$10.  
(www. amazon.com)  
 You can't buy love, because when it's real, it's priceless.  
 (www.facebook.com/pages/you-cant-buy-love-because-when-its-real-its-priceless/)
2. the gratuitous love of God  
 (www.christianhistoryinstitute.org/magazine/article/calvin-archives-gratuitous-love-of-god/)

## 5. おわりに

関連性理論 (cf. Sperber and Wilson 1995) を基にした「ずれの解消モデル (incongruity-resolution model)」(cf. 内海 2007: 407) によれば、文学作品の持つ文学性(literariness)は、作品内容と読者の背景知識との間に発生した「認知的負荷を軽減するような (部分的にずれを解消するような) 豊かで多様な解釈を得る」(内海 2007: 407) ことによって生じる。つまり、文学性とは読者が既成概念を見直し、再解釈する過程ということである。

人間の身体的経験や基本的な日常生活体験に根ざす概念メタファーは、我々の既成概念そのものと言っても良いだろう。O Henry の短編はありふれた概念メタファーを基盤にし、既存の目標領域制約の許す範囲内で、控えめにひねりを加えている(「生長サイクル」をちょっと逆転させたり、「負担(大)→献身(大)」の対応関係を一瞬危うくしたりする)。創造的文脈によって概念構成要素の対応関係の増設を図ることは一切行われぬ。だが、そうした些細な見直し、再解釈しか読者に要求しない控えめなひねりが、彼の短編にほんのりとした暖かみやほろ苦さを与えているのだろう。

## [参考文献]

- Evans, Vyvyan. 2007. *A Glossary of Cognitive Linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Freeman, Donald C. 1995. Catch [ing] the Nearest Way: *Macbeth* and Cognitive Metaphor. *Journal of Pragmatics* 24. 689-708.
- Grady, Joe, Sara Taub, and Pamela Morgan. 1996. Primitive and Compound Metaphors. In *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. Adele E. Goldberg, 177-187. Stanford: CSLI.
- Lakoff, George. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. In *Metaphor and Thought* (second edition), ed. Andrew Ortony, 202-251. Cambridge: CUP.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Turner. 1989. *More than Cool Reason: A Field*

- Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- 梶山洋介. 2006. 『日本語は人間をどう見ているか』. 東京: 研究社.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition* (second edition). Oxford: Blackwell.
- Turner, Mark. 1996. *The Literary Mind: The Origins of Thought and Language*. Oxford: OUP.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』. 東京: 研究社.
- 内海彰. 2007. 「認知修辞学における比喩の認知過程の解明」. 楠見孝 (編). 『メタファー研究の最前線』. 403-420. 東京: ひつじ書房.

**[使用辞書]**

- 市川繁治郎, David Dutcher, Stephen Boyd, 沢村 灌. (編). 1995. 『新編英和活用大辞典—英語を書くための 38 万例』. 東京: 研究社.
- 竹林 滋 (編集代表). 2002. 『新英和大辞典 (第 6 版)』. 東京: 研究社.

**[使用テキスト]**

- Henry, O. *O Henry 100 Selected Stories*. London: Wordsworth Editions, 1995.
- Shakespeare, William. *The Tragedy of Macbeth*. (an updated edition), eds. Barbara A. Mowat and Paul Werstin. New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2013.